



Title	一休宗純の林和靖賛について
Author(s)	中本, 大
Citation	詞林. 1989, 5, p. 34-44
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67269
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

一休宗純の林和靖賛について

序

大徳寺真珠庵に、「一休梅花像」と称される、一休宗純（二三九四～一四八二）の頂相がある。曲象に着座した全身の背景に、梅花の施された構図である。大心・大燈西国師以来の法嗣を誇る大徳寺系の祖師、虚堂智愚の頂相を、全面的に模倣したとされるその肖像には、次の如き自賛が認められる。

貧病老衰山舍居

貧病老衰山舍の居

前村梅鶴興何虚

前村の梅鶴興何ぞ虚しき

佳名但願発身後

佳名但だ願ふ発身の後

和靖家無封禅書

和靖が家に無し封禅書

「睦室宗陳侍者図余陋質、需贊語、野詩一章題以塞請云」と附記されたこの七絶は、署名により、応永二年（一四六八）閏十月、一休齡七十五、晩年の作であることが知られる。一休の愛弟子であり、『狂雲集』にもその名が見える、睦室宗陳侍者の所望に応じたという自賛の詩句には、梅花図にふさわしく、

中本 大

「山居」「梅鶴」「佳名」などの語が用いられている。そして、これらの梅花への連想を収斂させるべき役割を為すのが、結局の「和靖」、即ち宋代の詩人、林和靖なのである。

一休には、この画像の他にも、何点かの墨梅画があり、賛詩が留められている。そしてその表現には、林和靖詩の影響を受けたものが少なくない。本稿では、『狂雲集』所収の、夥しい数の梅花詠・林逋賛を取り上げ、一休の詠法の特徴を考察していくことにする。

一

和靖先生、林逋は、北宋初期の隱逸の詩人である。景勝の地西湖の小島、孤山に廬を結んだため、西湖處士とも號した。詠梅詩に秀れ、その七律「山園小梅」詩は広く賞賛された。その代表作をあげておく。

衆芳搖落獨嬋妍

占斷風情向小園

疎影橫斜水清淺 暗香浮動月黃昏

霜禽欲下先偷眼 粉蝶如知合斷魂

幸有微吟可相狎 不須檀板與金尊

詩中、とくに頷聯の両句には、爾來、実に多くの大家が誘慕される所となる。文忠公・歐陽修が激賞したのを始め（『帰田録』）、元祐党派の宰相、『資治通鑑』を完成させた司馬光も、曲盡梅之體態

（『溫公續詩話』）

と賞賛の声を惜しまない。しかし、こうした中で、本国叢林に最も影響を与えたのは、蘇東坡・黄山谷の二大詩家の評価である。南宋の許顗の『彦周詩話』では、一聯を引用している。

大凡和靖集中、梅詩最好、梅花詩中此兩句尤奇麗。東坡和少游梅詩云、「西湖處士骨應槁、只有此詩君厭倒」僕意東坡亦有微意也。然和靖詩屬對清切：以下略：

淮海居士、秦觀（少游）に和したその内容から、東坡が、和靖詩に強く傾倒していたこと、更に、和靖詩を東坡詩に比して、その詩の属對清切なることを評述している。

一方、黄山谷は、和靖の對句を手離して賞嘆しない。『山谷詞』にいう。

歐陽文忠公極賞林和靖「疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏」之句、而不知和靖別有詠梅一聯云、『雪後園林纔半樹、水邊籬落忽橫枝』似勝前句、不知文忠何緣棄此而賞彼。文章大概亦如女色、好惡只繫於人：以下略：

歐陽修以降、人口に膾炙した「疎影・暗香」の一聯以上に、異なる「梅花」詩の對句、

雪後園林纔半樹 水邊籬落忽橫枝

の品格を尊しとするのである。しかし、こうした評論も、和靖の一聯が、「膾炙天下二百年」（周紫芝著『竹坡詩話』）と、評価の確定した中でのことであった。

山谷の論評は、魏慶之編の『詩人玉屑』にも収められる。東坡詩にふれた『許彦周詩話』と共に、本国叢林にもたらされ、五山の詩壇でも、定着したことが窺われる。一休から、時代を下ることおよそ一世紀、中世五山の最末期に二度の入明歴を有す、策彦周良（一五〇一―一五七九）の述とされる『蠹測集』では、その冒頭で和靖詩にふれて云う。

水影月香ノ句ト云ハ。和靖先生林逋カ梅花ノ詩ニ。疎影橫斜水清淺。暗香浮動月黃昏ノ句ヲ作タソ。此詩ヲ香影一聯トモ云ソ。

本国で、和靖の詩句が、いかに広く詩作に参照されたかを示唆する実例となるだろう。

和靖詩の本国での定着は、唐土の詩話・詩論のみによるのではない。それ以上に、画題として広く取り上げられたことが大きい。

『詩人玉屑』卷之十七、西湖處士の項では、前掲、山谷の評論に次いで「蔡寬夫詩話」を抜粹する。文中、香影一聯を「誠為警絶」と賞した後、

唐人多摘句爲圖、蓋以此。

と述べる如く、画題としても最適なものとして捉えられたのである。扶桑禪林の面雄、義堂周信・絶海中津にも既に親しいものであったらしく、幾例が見ることが出来る。ここでは、各一首ずつあげておく。

題扇面

義堂周信

占斷西湖雪後天

黄昏月下鶯吟肩

不知疎影暗香外

添得梅花詩幾聯

題梅花野處圖

絶海中津

淡月疎梅壁水灣

何人注意寫荒寒

一枝影瘦清波上

應是孤山雪後看

〔『空華集』〕

〔『舊畧稿』〕

義堂の便面への賛は、雪後の西湖の風景に立つ吟客を、和靖詩の世界においたものである。一方、絶海の七絶は、寒中に瘦損する梅木の様を吟じたものである。

こうした五山詩壇の先達者に導かれ、梅花詠が、禪林で最も愛唱されるようになる状況は、希世墨彦（一四〇四〜一四八八）の次の七絶に集約されている。

扇面

玉局誰何月黑時

玉局誰か何んせん月の黒き時

連仙得意忽橫枝

連仙意を得たり忽ち横枝

近來句法君知否

近來の句法君知るや否や

不賦梅花不是詩

梅花を賦さざれば是れ詩にあらず

『雪巢集』『希世稿』に収められたこの画賛は、応永三十年、希世二十歳の作とされる。世代をほぼ同じくする一休は三十歳、義堂らの次世代たる、江西龍派・心田清播らが詩壇の中枢にあった時期である。当時、梅花を吟じることが、どれほどの意味を有していたかを物語る、興味深い事例となろう。こうした時勢を鑑みれば、一休の数多の詠梅詩も、時代の必然の中にあつたことが窺われる。

二

『狂雲集』中の一休の梅花詠は二十首余、和靖賛は十首以上にもおぼる。そしてその大部分は、『詩和總龜』の記述に見られる梅妻鶴子の故事及び、香影一聯によつた類型的な句法である。そうした意味では、習作的とすらいえよう。一休はこうした表現を、初学の段階で、唐土の詩作から学んだものと思われる。そのもっとも強く影響を与えたと見られるものの一つに、『新選集』『新編集』の二集がある。

『新選集』は江西龍派、『新編集』は瑞巖龍惺及び江西の俗弟であり、且つ一休の詩匠であつた慕哲龍攀の手になる初学者のための選集である。編者の顔ぶれからも、江西の庵舎のあつた建仁寺靈泉院を中心に、当時広く行われたと思われる。この画書は、佚して現在伝わっていない。しかし、その詩数が編こ

とに千余首にのぼる大部であったこと、更に、撰録詩人は、中唐から宋・元三代にわたっていたこと等、その概要が『錦繡段』跋文によって知られることは、多くの先達の指摘されるとおりである。

近有新編新選二集。而出自中唐至元季。每篇十餘首。童蒙者往往傳誦。余暇日采摭。為三百二十八篇。又自書以與二三子令誦之。庶幾知鳥獸草木之名云。

唐正丙子林鐘十月七日

前建仁天隱叟龍澤書。

右の一文により、天隱龍澤編の『錦繡段』は、『新編・新選』二集の抄出本であったことが分かる。

今、この両佚書の外郭を辿るべく、『錦繡段』を繕ぐと、一休詩への影響が少なからず認められるのである。

『狂雲詩集』に、「孤山和靖圖」という画題詩がある。

雅筵荒艸又青春 雅筵荒艸又青春

世上遊人總不來 世上の遊人總に來らず

秀句寒暄詩幾許 秀句寒暄詩幾ぞ

一生只是一心梅 一生只是一心梅

この七絶は、転句の詞章が眼目とされる。これは、蘇東坡の『病中大雪數日云々』詩の以下の二聯に典故したものである。

有客獨苦吟 清夜熱自課

詩人例窮蹇 秀句出寒飢

『秀句寒暄』は、『狂雲集』中の他の詩作にも用いられる、一

休の好んだ詩語の一つであった。一休はここで、淹塵に汚されることを恐れ、遊賞もせず、清夜にも苦吟を課した東坡の姿を、和靖に投影する。そして結句で、生涯一心に梅花を賞し続ける和靖の、尽きることのない詩情に共感するのである。こうして見みると、この七絶は、和靖詩の世界に新たな風景を付加したものと考えられる。

だが、こうした情景は、一休にとって既に馴染み深いものだったのである。『錦繡段』書圖部、僧希叟作の「和靖雪後看梅圖」詩にいう。

破曉湖山人畫時 短篷搖雪傍疎籬

一心只在梅花上 凍損吟身也不知

曉方の孤山、雪深い茅屋を出て、疎籬に沿う梅花を一心に吟じ、身の損傷する和靖の姿を描いたこの画題は、「和靖凍吟圖」として『新選集』により人口に膾炙していたことが、策原の『蠡測集』の記述から窺われる。

和靖凍吟圖ト云ハ。氷枯雪老時分ニ凍吟シタソ。好事ノ者

工ニカイテ世ニ傳ソ。新選集ニ和靖雪後看梅圖ノ詩ニ。一

心唯在梅花上凍損吟身也不知ト云句力有ソ。

一休詩の結句、「一生只是一心梅」は、希叟詩「一心只在梅花上」によったもの、「秀句寒暄」も「凍損吟身」に通じるものである。

一休詩への『錦繡段』、即ち『新選・新編集』の影響はこの一例に留まらない。一休の描く孤山の風景の多くは、既に唐土

の梅花詩によって、確立されたものである。一休「和靖梅下居」連作第五首は、孤山の風俗を描く。

愛鶴横琴無客來 鶴を愛し琴を横たへ客の來たる無し

前村風露濕青苔 前村の風露青苔を濕はす

宋朝厚祿總閑事 宋朝の厚祿總に閑事

換得孤山千樹梅 換へ得たり孤山千樹の梅

起・承句は、葉介老の画題詩「和靖索句圖」の次の詩句による。

黃葉蒼苔滿石床 畫成童鶴亦淒涼

室町後期の学僧・月舟寿桂（一五三三）は、その講説書『錦繡段抄』で両句を、

和靖カ居處ノ體ハ葉ソ苔ソ滿滿テアルソ。童鶴モ淒涼トシ

テ塵俗ノ外ニアルカ如ク也。

と注記する。「枯葉に青苔」が、孤山の廬を描写する定型表現となっていた。前掲「孤山和靖圖」詩、起句「雅健荒艸又青苔」も、これによっている。

また、一休「孤山和靖圖」連作の第三首にいう。

新月清標一朵粧 新月清標一朵の粧ひ

寒窓吟罷五更霜 寒窓吟じ罷む五更の霜

花元無語非無意 花元語無し意無きに非ず

春入孤山塵亦香 春孤山に入りて塵も亦香し

起句、美しく清らかな新月の夜に映える一枝の梅の艶なる様は、承句により、窓からの光景であることが示される。転句、詩作を終え、五更を知り得るのは、移ろう月光に転ずる梅花の影を

更点、時計がわりに用いるからである。

こうした解釈が成り立つのは、この七絶が、やはり『錦繡段』所収の趙紫芝「吟窗」詩の情景に拠るからである。趙詩に云う。

獨坐吟殘幾度春 小窗元不受塵昏

夜深村落無更點 只把梅花記月痕

月舟「錦繡段抄」も転・結句を、

村落ノイヤシイ處ナレハ更点ナントモナイ程ニ此窗ハアソ

ココ、破ツ。月ノ痕能ミユル程ニ梅華ノ影ノ轉スル處デ。

夜ノ時節ヲ何時テアルソト知ソ。

と解説する。一休詩のみでは、出にくい解釈である。

一休詩、結句は、趙詩の転句に拠る。芒屨の「塵昏に汚されない清潔な窓」を、一休は、「もし孤山であれば、飛散する塵までも、梅花の清香によって香しくなるだろう」とする。やはり趙詩を踏襲したと見ることに、一休詩の眼目が更に広がるのである。

このように、一休は定型化された水墨画の中の風景と人物に、心情を汲み入れることを、こうした詩作を換骨奪胎することによって学んでいったのである。

三

『錦繡段』所収詩、即ち江西や慕哲らが集めた詩家の作が、一休の梅花詠・和靖像形成の一翼を担っていたことは、一休の

詩作を考察する上で無視できない。しかし、前掲、希世靈彦詩の詞章に見られるような注目すべき梅花詩の尊重や、『狂雲詩集』中、他の詩題を圧して多い和靖賛など、五山詩壇でこのような流行を促した積極的な契機が、今一つ想定されてよいだろう。そうした役割を果たしたものとして、次に『聯珠詩格』の影響を考えていきたい。

元代、于濟の撰になる『唐宋千家聯珠詩格』は、唐宋の作家の七絶ばかりを集めたものである。杜甫・李白の大家から、伝記未詳の群小詩人の作まで掲載した様は、雑然とも形容し得るほどである。その性格を見るに、収録を七絶のみに限定し、実際の詩作の範型としての意義の大きい点、詩作を分類整理して集成している点などは、『錦繡段』の性格とも相通じる所もある。また、『中華若木詩抄』に収められた王蕭綺・許子文等の別集の伝わらない、伝未詳の作家の作品をも網羅しており、出典となった可能性をも有するものでもある。この他、義堂以降、中世禪林でこの詩学書の広く流布していた状況は、芳賀幸四郎氏の『中世禪林の学問および文学に関する研究』に詳しく述べられている。

こうした、五山詩壇に少なからぬ影響を与えた『聯珠詩格』の、内容面での顕著な特徴として、梅花詠がかなりの数にのぼることがあげられるのである。それは劉後村、蔡止孫、方秋崖といった比較的名の知られた詩人から、他の選集類に名の見えぬ、馴じみのない作家まで実に多岐にわたっている。更にその

詠法を見ると、西湖の風景、即ち孤山の和靖先生に言及されるものも多数を占めていることがわかるのである。そうした例を二首あげておく。

梅

徐抱獨

孤山處士風流遠

招得梅花枝上魂

疎影暗香猶昨日

不知人世幾黃昏

水壘差梅

陳蘭齋

自讀西湖處士詩

年年臨水看幽姿

暗窗畫出橫斜影

絕勝前村夜行時

一休の詩作も、この選集から発想を得るところ少なくない。

『狂雲詩集』に、「和靖夜坐圖」連作二首がある。

夜坐閑吟寂寞時

夜坐閑吟寂寞の時

鍊絮紙帳獨題詩

鍊絮紙帳獨り詩を題す

楊花何處春雪熟

楊花何處か春雪熟す

月滿寒梅雪一枝

月は滿つ寒梅雪一枝

咸平隱士譽難藏

咸平の隱士譽れ藏し難し

樹樹梅花春興長

樹樹梅花春興長し

無酒吟魂夢猶冷

酒無く吟魂夢猶冷まじ

風浪殘曉滿頭霜

風浪殘曉滿頭の霜

右の画題による詩作は、管見にふれ得たかぎり、他の五山僧の詩集には見出せない。灯火に向かって一人詩作に耽ける姿は、あるいは前掲『錦繡段』中の葉介老「和靖索句圖」と契機を同

じくする可能性もある。しかし、尚『聯珠詩格』の影響を無視できないのは、「夜中夢寐ままならず、小窓の机辺に坐して書などを開く」という光景を描いた詩が、この集に実に多くみられるからである。

父兄誨我髫髻初

老不成名髻髻疎

紙帳鐵鑿風雪夜

夢中猶讀小時詩

〔劉後村「夢中」〕

右は劉後村の作。後村の「紙帳鐵鑿風雪夜」は、名利・出世を目しての克苦勦勵の様であった。しかし老いて未だ名成らず、白髪のみをふやしていく身は、名譽を諦めること叶わず、夢中にも浮かぶのは壮強な頃の姿である。

これに対し、類似した詩句・光景を用いながら、一休詩の和靖は、ひたすら春待つ梅花を吟じるのみである。和靖の心がそれ以外にないことを、二首目の末二句が的確に表現している。

幸いに微吟の相狎（な）る可き有り 須ひず檀板と金尊と
〔山園小梅〕

とした和靖の冷徹なまでの清標さ、それは風にさらされ、凍損した己の姿が物語っているとするのである。そこからは、名利に走る姿は未塵も感じられない。一休は、その最も効果的な対照を示すため、劉詩を用いたと考えられよう。

更に詩例をあげる。

遠鐘入枕通新晴

衾鐵稜稜夢未成

起傍梅花讀周易

一窓明月四簾聲

雙雙瓦雀行書案

點點楊花入硯池

閑坐小窓讀周易

不知春去已多時

〔魏鶴山「夜景」〕

一床玉雪疊無瑕

爐有生香鼎有茶

夜半起來讀周易

好看明月透梅花

〔葉平岳「暮春」〕

この三首は、「讀周易字格」に収められる。夜半に閑坐し書を関す姿は、春月夜の花と共に賦されること、一休詩に通じている。二首目のみが楊花で、晩春を示す。一休詩にも、暮春の楊花の景が用いられていることは、注目すべきであろう。

坐到心清有妙香

蒲團紙帳任更長

閑閑不受庭前月

分付梅花自主張

〔謝疊山「紙帳」〕

起句の清香は、梅花の薫香であること、結句より知られる。一休「孤山和靖圖」にいう。

寂寞孤山一老儒

寂寞たる孤山の「老儒

吟身白髮與梅瘦

吟身白髮梅とともに瘦す

先生春興儼然面

先生春興儼然たる面

千歲清香滿畫圖

千歲清香畫圖に満つ

苦吟の表情は一休詩の二・三句により詳しい。承句、「與梅瘦」は、用字字格、鐘梅心「客中」詩の「梅花瘦盡相思苦」による。結句、「千歲清香」は、「心清」故の「妙香」であること、

「苦吟」詩で明らかである。

かように、一休「和靖夜坐圖」詩は、『聯珠詩格』所収詩の表する情景から、閑坐、春興、苦吟、清香、寂寞といった觀念を描出させていたのである。

『聯珠詩格』の、一休詩に与えた影響について、更に詩例をあけて考察する。

一休「畫梅」詩は、やはり孤山の林逋に言及した七絶である。

畫出橫斜吟裏腸

畫き出す横斜吟裏の腸

孤山風月在扶桑

孤山の風月扶桑に在り

先生可憐千秋譽

先生梅ゆべし千秋の譽

猶有梅花渡海香

猶梅花の海を渡り香しき有り

注目すべきは転句である。「咸平隱士蒼難藏」(「和靖夜坐圖」)「芳声未朽風流土」(「和靖梅下居」)と、その誉れの語り継がれることを賞でる詩句を連ねてきた一休には、珍しい逆説的表現である。しかしこうした表現も一休独自のものではない。『聯珠詩格』用本字格、張蒙泉「孤山」詩にその発想が見える。

花回疎時香更清

已折梅下了平生

先生本是逃名者

却為梅花引得名

転・結句、「茂陵他日遺稿を求むとも 猶は喜が會て封禪の書無きを」(「自作壽堂因書一絶以志之」詩)、「君の徳の堯舜に如かざる者は祭る能はず」(「宋史」)と、世事の名利とは

全く無縁であることを望んだ和靖が、その愛しい梅花のために、逆に名を留めることになったとする設定は、従来の和靖賛には、ほとんど見られぬものである。

同様の視点は、「用誤字格」中の、王蕭綺「梅花」詩の三四句に見られる。

不受緇塵半點侵

竹籬茅舍自甘心

只因誤識林和靖

惹得詩人說到吟

この絶句は、『中華若木詩抄』にも引かれ、

常ニハ林和靖ニヨリテ梅モ芳キヲ添タナント、作ルニ、一段カワリテ和靖ニ識ラレテヨリ汚ル、ト云フ心ニ作リタル
カ妙也

と注記される。朝倉尚氏は、論稿「『中華若木詩抄』寸見——編纂意図について——」(『禪学研究』第六五号、昭和六一年)で、この詩に注目され、「本朝禪僧の觀念裡には、特に梅花——林和靖——疎影横斜水清淺、暗香浮動月黄昏——佳句として定着している。このいわば文学史上における常識に対して、挑戦している。そして王蕭綺の詩は禪僧に、梅に限らず、詩の代表的素材とそれに関わる逸話・故事、佳句が「同様に発想すれば価値を転換することができる」という、模範を示しているように思う。」と述べておられる。首肯すべきであろう。しかし一休は、『中華若木詩抄』の著者である、如月寿印の指摘より早く、『聯珠詩格』によって価値の転換を学んでいたのである。こうした価値の転換は、「好異」と評され、宋代詩論の中で、

度々論じられている。その最たる詩人が「赤壁詩」を著した杜牧とされること、『詩人玉屑』を通じ、杜牧好みの一休も熟知していたはずである。そうした評論をより身近な例として、実作で示したのが『聯珠詩格』であった。一休等、五山詩僧がこぞって推賞し、作詩に利用したのも肯ける所である。

両者の「梅花詠」の關係は、当然筆を尽くし得ていない。最後に詩句を中心に、更に確認しておきたい。引用は、『狂雲詩集』の「梅」詩である。

萬木叢中獨稱尊 萬木叢中獨り尊しと稱す

風流和靖旧精魂 風流和靖旧精魂

仙桃深處漁人路 仙桃深き處漁人の路

唯有梅花咲不言 唯梅花有れど咲ひて言はず

承句、和靖と梅花の一体化は、類型表現である。

梅花因果如何受 處士清高是後身

（鄧愛山「梅花」）

墳草年年一度春 梅花無主自飄零

定知魂在梅花上 只有春風喚得醒

（吳菊潭「和靖墓」）

狂吟莫向梅花讀 怕有詩魂樹下聽

（高梅谷「孤山」）

孤山處士風流遠 招得梅花枝上魂

（徐抱獨「梅」）

「清高」「風流」等の概念で、和靖と梅花を一心同体とする

もの、その後身、生れかわりと見るもの等、和靖を詠む場合の定型となっている。

結句は、南宋四大詩人の一、楊成齋の「松聲」詩（第三句量字格所収）の起句、「松本無聲風亦無」の句型と一致した、一休「孤山和靖圖」詩転句、

花元無語非無意 花は元語無けれど意無きに非ず

と同義である。しかしその意図する所、王友山「老梅」詩の三・四句に接近している。

人來只道梅花老 不道梅花笑老人

六十の春を迎えた老叟が、老梅に声をかけると、あたかも微笑したが如くであったという、ユーモラスな詞章である。「咲ひて言はず」は、禪家にとって、当然「拈華微笑」（『無門関』第六則）の公案が想起されるはずである。一休は、和靖と梅花に、釈尊と頭陀第一たる摩訶迦葉尊者を投影したと思われる。

四

最後に、一休の孤山詩で、和靖以外に、複数の人物が詠まれているものをふれておく。

朝岡興禎の著になる『古畫備考』釈門部・一休宗純和尚の項には「智圓和靖夜話圖」とあり、賛詩を記している。

月滿孤山殘曉燈 月孤山に滿つ殘曉の燈

光明遍照智圓僧 光明遍照智圓僧

西方誘引美人路 西方誘引す美人の路

消破梅花一夜水 消破す梅花一夜の水

智圓の伝記は、元代、釈常撰『佛祖歷代通載』に掲載される。中庸と号したことが『西湖高僧事略』に見え、西湖、孤山に居し、林逋の隣友となり、詩文に親しんだことが知られている。「智圓和靖夜話圖」が一休の当時、五山禪林で既に定着していたであろうことは、絶海中津『蕉嚴稿』収録の次の画題詩により確認される。

題畫梅

孤山曾訪中庸子 孤山曾て訪う中庸子

照水梅花處士家 照水梅花處士の家

驛使不傳南國信 驛使傳へず南國の信

黄昏和月看橫斜 黄昏月に和し横斜を見る

連作の多い、一休の梅花詩・和靖賛にあつて、中庸子・智圓は、他に一首、賛詩が見られるのみである（群書類従本には収められない）。某かの要請による、画賛詩であつたものと思われる。

孤山を詠じた詩で、和靖以外の人物に言及した例として、次の七絶がある。

孤山天地興悠々 孤山の天地興悠々

唯有梅花無客遊 唯梅花有りて客の遊ぶ無し

李及若吟香影月 李及若し香影の月を吟ずれば

飯舟白集亦風流 飯舟白集亦風流

「孤山和靖圖」連作の第四首である。

転句、李及は、「宋史」列伝に名が見える士大夫である。杭州にあった時、宴遊に加わらず、孤山に赴き、林逋と親交し清談したという。結句、「白集」は白氏文集を指す。常に清貧に甘んじた李及は、市にて「白桑大集」のみを購ひ、常に携えていたという伝による。和靖に劣らず資質清介、清淡の生涯を終えた人であった。

本国禪林では、元より伝えられたという、「十雪詩」（成立契機は惟自得殿『東海瓊華集』所収「和十雪詩序」に見える）中の一題「李及郊雪」の詩題により親しまれた。惟自をはじめ、南江宗沅、瑞溪周鳳らの別集にその詩題が見在している。李及を言及するものは、凡そこの詩題に限られる。その中で、南江の『漁庵小藁』には、興味深い七絶が見られる。「讀和靖詩」という次の作である。

咸平風月事悠々 咸平の風月事悠々

一臥湖山雪滿頭 一たび臥す湖山雪滿頭

李及未知香影句 李及未だ知らず香影の句

惟携白集上歸舟 惟だ白集を携して歸舟に上る

三・四句が、一休詩と非常に類似している。孰れかが、詩句を踏襲したと考えられるほどである。玉村竹二氏は、『五山文学新集第六卷』南江宗沅集の解題で、一休と南江の邂逅を、建仁寺靈泉院友社に推定される。尊重すべき論である。両者が共通のテキストを有していたとも考えられる。また、南江集の別本

である、『鷗巢遺集』では、詩題を『談和靖詩』と作している。談じた相手を、一休と示唆しているようで興味深い。

しかし、その製作年も不明の今、二詩の関係をこれ以上指摘することはできない。一休と南江の文学上の交友ともども、今後の考察を待たねばならない。

結

一休の梅花詩・和靖賛について、唐土の詩作の影響を中心に論を進めてきた。大陸文学の受容の点で、一休の学んだのが、数多の群小詩人の作であったことは留意を要する。

南宋末期以後、元代にかけて、唐土では、唐宋の大家を凌駕する詩人を輩出し得なかったこと、吉川幸次郎氏が『宋詩概説』で述べられるとおりである。詩作の中心も、士大夫から市井の小詩人へと移っていった。蓋し、実作と評論・研究に隔差が生じたのである。『聯珠詩格』に負うところの大きい一休の梅花詠は、そうした文壇の状況を、はからずも扶桑で再現することになった。即ち、東坡や山谷が賞した和靖詩を祖述する一方、句法に参照したのは、陸游や范石湖、方秋崖らの別集でもなく、初学向きともされる選集だったのである。

本国禅林に視点を移しても、七絶の偏重、作詩の質の低下、講説の重視等の弊害は、一休のみならず、応永年間以降、五山詩壇全体が抱える問題でもあった。こうした時代の制約と、禅

林での梅花詩流行という趨勢の中、一休は多作により、作詩の方法を学んでいったといえる。

大陸文学の享受史の中に一休を位置付けた場合、その受容の五山文壇に拠る所、非常に大きい。詩題・詩材の考察を通じ、享受の系譜を明らかにすることは、一休像解明の上で、看過し得ない問題であろう。

〈付記〉『狂雲集』本文は、続群書類従本に拠った。尚、異同については、「狂雲集諸本の校合について」「考異狂雲集」(伊藤敏子氏編著『大和文華』四一号・昭和三九年)を参照した。他の五山詩僧の作品は、『五山文学全集』(上村観光編)『五山文学新集』(玉村竹二氏編)による。

(本学大学院博士前期課程)